

會津八一記念博物館の課題と展望

Problems and Perspective of the Aizu Museum, Waseda University

塚原 史

Fumi Tsukahara

【発表要旨】

各国の主要大学は充実した美術館（博物館）を有し、その存在と活動が大学の社会的評価に貢献していることはよく知られている通りです。それらの多くは Harvard University (Fogg, Busch-Reisinger, and Arthur M. Sackler Museums) のように、卒業生や寄付者・寄贈者の名を冠していますが、早稲田大学の坪内逍遙博士記念演劇博物館（1928 年創立）と會津八一記念博物館（1998 年創立 以下 Aizu Museum）も開設のきっかけとなった先達の名を冠しています。そのこと自体は大学の文化の伝統を後世に伝える大きな意味がありますが、他方、名称が当該施設の方向性を限定する傾向もないわけではありません。

Aizu Museum の企画展は、會津八一自身が所蔵していた奈良美術関連の美術品（中国の明器や鑑鏡・瓦磚などの古美術品）を中心とする「會津コレクション」から始まったこともあり、東洋美術中心でしたが、近年「荒川修作展」、「ル・コルビュジエ展」、「ゴヤ版画展」、「パリから学んだ画家たち展」など、西洋美術、モダンアート系の企画を増やすことにより、ここ数年で来館者数が年間一万数千人から四万数千人に増加しています。このような現状を前提として、今後は、東洋美術と西洋美術・モダンアートとのバランスの取れた両立を実現することが Aizu Museum の課題と展望となるでしょう。

【プロフィール】

早稲田大学政治経済学部卒業、パリ第三大学博士課程中退。現在、早稲田大学會津八一記念博物館館長、法学学術院教授。専攻：表象文化論（ダダ、シュルレアリスム等）、フランス現代思想研究（ボードリヤール等）。主要著書：『ダダイズム—世界をつなぐ芸術運動』（岩波現代全書）、『ダダ・シュルレアリスムの時代』・『20 世紀思想を読み解く』（ちくま学芸文庫）、『反逆する美学』・『切断する美学』・『模索する美学』（論創社）、『ボードリヤールという生きかた』（NTT 出版）他。